

日々小論

母と子の絆

論説委員 松岡 健

神戸の元町映画館で「母と子の絆」（稲塚秀孝監督）という作品を見た。西日本一帯に被害が出た「カネミ油症」を追ったドキュメンタリー映画だ。さまざまな症状や偏見に苦しむ患者たちの悲痛な証言を伝え、国や原因企業による救済が進んでいない問題を訴える。

この油症は1968年に発覚した。カネミ倉庫（北九州市）製の米ぬか油を口にした人などに、皮膚や内臓の疾患、痛みや倦怠感（けんたいかん）といった全身症状などが起きた。油の製造過程でポリ塩化ビフェニール（PCB）が混入。これが加熱でダイオキシン類に変化していた。PCBは鍾淵化学工業（現カネカ）高砂工業所で造られたものだった。

映画は油症が「食中毒」だった点に焦点を当てた。画面に出てくる津田敏秀・岡山大名誉教授（疫学）には以前取材したことがある。「全容が調べられな

かった食中毒は水俣病とカネミ油症だけ。食中毒では未認定患者は出ないのに、患者が何人かさえも分からない」と聞いた。

油症の被害は1万人以上が訴えたが、認定患者は2300人余り。映画は、食中毒事件では本来必要がなく、被害者を分断する認定制度の矛盾を突く。

とりわけ壁が厚いのは、子や孫の世代の患者認定だ。映画に登場する患者の女性は、51年前に生んだ長男に重い障害や疾患があり、4カ月で亡くなった。「（油症と）認めてほしい。墓前に報告したい。それだけなんです」と切々と語る。

女性はわが子の認定に向け、親子の絆であるへその緒のダイオキシン類を調べてもらうことにした。近く検査結果が出るという。油症は昔あった被害ではなく、現在の問題である。

神戸の上映は終了したが、11月に大阪や京都で公開される。